

野土あれこれ

第6号

発行 あさる野市教育委員会 東京都あさる野市二宮350 電話 042-558-1111 FAX 042-550-3451

雨間地区遺跡群から掘り出された発見の数々

— 旧石器時代・縄文時代・古墳時代の生活を垣間見る —

はじめに

JR五日市線の東秋留駅と秋川駅のほぼ中間地点、線路の南側に広がる約27haの広大な土地があさる野市雨間土地区画整理事業用地です。ここには既に大形スーパーやファミリーレストラン、また、たくさんの住宅が建ち並びはじめています。雨間地区遺跡群（以下「雨間」と記します）は、この事業用地内の発掘調査として、平成3年7月末から平成10年3月まで行われてきました。

この調査は、事業用地内に6地区を設定し、総面積約38,000㎡を発掘しました。この結果、旧石器時代から現代にわたる様々な貴重な資料が発見されました。

ここでは、旧石器時代・縄文時代・古墳時代の3時代の特に注目される遺構や遺物について紹介していきます。なお、年代は別表の編年表を参照してください。

旧石器時代 — 非常に小さな石器 —

日本の旧石器時代の研究は1946（昭和21）年に相沢忠洋^{ただひろ}氏が、群馬県新田郡笠懸村岩宿の赤土の露頭からはじめて石器を発見したことに端を発します。その後、1949（昭和24）年に岩宿遺跡の発掘調査が行われ、その結果縄文時代の土器が出土する下層から石器が出土し日本にも旧石器時代に人々が生活していたことが明らかにされました。以後この時代の研究が本格的に始まり、今では縄文時代以前にも日本に人が住んでいたことが当たり前として語られるようになってきました。そして、現在日本の旧石器時代は、今から約60万年前から1万3千年前までの間を指しますが、今後の調査の成果によっては更に古くなる可能性が考えられます。この時代は前期・中期・

編年表

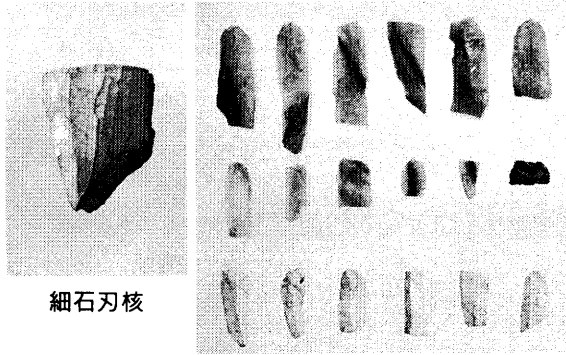
時代	期	およその年代
旧石器時代	前期	約60万年～13万年前
	中期	約13万年～3万年前
	後期	約3万年～1万3千年前
縄文時代	草創期	約1万3千年～1万年前
	早期	約1万年～6千年前
	前期	約6千年～5千年前
	中期	約5千年～4千年前
	後期	約4千年～3千年前
弥生時代	晩期	約3千年～2千4百年前
	前期	約2千4百年～1千7百年前
古墳時代	前期	約1千7百年～1千6百年前
	中期	約1千6百年～1千5百年前
	後期	約1千5百年～1千4百年前

後期の3つの時期に分かれます。雨間から発見された遺物は後期に位置づけられます。

それでは雨間の調査からは、旧石器時代のどのような石器が出土したのでしょうか。

この遺跡からは細石刃^{さいせきじん}と呼ばれる非常に小さな石器（長さ0.5～3.2cm、幅約0.5～1.2cm、厚さ0.1～0.5cm）38点とこの細石刃が剥ぎ取られた細石刃核^{さいせきじんかく}3点が発見されました。それらを作った場所や、石器の他に石器を作るために使われた台石^{たいいし}やハンマーなどの道具が発見されています。この小さな細石刃がこの石から1点1点剥ぎ取られたものであることは、それらの数点がこの細石刃核と接合することから細石刃の製造方法が明らかとなりました。

では、これらの細石刃はどのように使われたのでしょうか。この石器は1点1点を単独に使用するのではなく、数点を組み合わせて1本の棒にカミソリの刃のように取り付けて使用したと考えられています。日本国内からは



細石刃核

細石刃

細石刃が装着されたまま出土した例はないのですが、シベリアの遺跡からは実際に細石刃がシカやトナカイの角などに装着された状態で発見された例があります。それによると、棒状に加工した角の両側に数点の細石刃を装着したものと片側に装着したものの大きく2種類があることがわかっています。これは、使用の目的や地域差によって異なるためと考えられています。このように装着された細石刃からその使用方法は、野牛の骨に突き刺さって発見された例などから槍先としての機能を持っていたものと考えられています。

次に細石刃を作るための材料と作り方を見てみましょう。細石刃にはチャートや珪質頁岩と呼ばれる石を選んでいます。また、細石刃をつくるための道具として使われた作業台やハンマーは閃緑岩や砂岩です。これらの石は、秋川周辺で手に入れることができるものです。細石刃はこのような材料や道具を使って雨間で作られたのです。その作り方は、最初に原石の一端を打ちかき平らな面(打面)を作り、その周囲を粗く打ちかいて整形します。そして、打面を上面として骨や木などの道具を使って押しつぶすようにして力を加えて細石刃を1点1点剥ぎ取っていきます。言葉で言うのは簡単ですが、細石刃は非常に小さな石器であるために、野菜や果物の皮を剥くのとではわけがちがいで、この時代の人々の手先の器用さがわかります。小さな原石からほとんど無駄なく石器を作ることができる、最も優れた技法と言われています。

こうして作られた細石刃は、刃が割れたり破損したりしてもすぐにその部分を取り替えたりして、再び使用できる道具として再生することができます。

旧石器時代の人たちは、獲物を追い求めて日々移動を繰り返す中で、こうした生活スタイルに合った高度な技術を生み出していったと考えられます。

この時代の資料が市内の発掘調査で、これほどまでに

良好な状態で出土した例は始めてで、貴重な資料となりました。

縄文時代 — 驚くべき遠距離交流 —

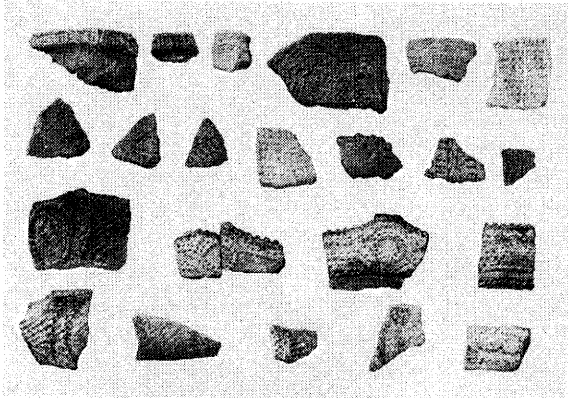
縄文時代は、今からおよそ1万3千年前より2千4百年前までの約1万年という長い期間を指します。この時代を6つの時期に分け、古い方から草創期、早期、前期、中期、後期、晩期と呼んでいます。市内には、縄文時代の遺跡が数多くありますが、中でも、縄文時代草創期の大量の石器や、サケ科の魚類の骨が出土した前田耕地遺跡は有名です。

雨間の調査では縄文時代の遺物としては早期から後期にわたる土器片や石器が出土しました。遺物の中で今回特に注目されたのが、縄文時代前期の土器片(諸磯c式土器)が約3万点出土したことです。この時期の土器片がこれほどまでに大量に出土した例は近隣ではありません。また、出土遺物の広がりが幅約13mの帯状に1辺約100mにも及ぶ方形の分布を示していました。不思議なことに、ここからは1軒の住居跡も発見することはできませんでした。しかし、同じ時期に作られた調理施設と考えられる集石土坑(直径1~2m前後、掘り込みが80cm前後、掘り込みの中に大量の焼けた石が含まれた遺構)は数十基発見されています。

それではこれらの土器について、もう少し詳しくみてみましょう。出土した土器は、以下の大きく3つのグループに分かれます。まず第1のグループは、竹管状の道具で丹念に押し込まれた細い粘土紐(結節浮線文)を渦巻きや弧状に施した土器です。出土した土器のほとんどを占めていたのが、第1のグループの土器でした。第2のグループは、ボタンや耳たぶ状の粘土を張り付けた土器です。更に、第3のグループは、貝殻の縁で連続して突き刺したり、縄文を転がした後、結節浮線文を弧状に施した土器です。このグループは、他の地域から持ち込まれたと考えられます。

では、このような土器を使っていた縄文人たちはどのような地域と交流をしていたのでしょうか。出土した土器や石器の材料となる黒曜石から、その動きを見ることができます。

まず土器ですが、第3グループでは興津式(写真上段)、大歳山式(写真下段)という型式名の土器で、前者が東関東、後者が関西地方を中心に分布しています。雨間から出土のこれらの土器は、この地域との交流によって持ち込まれた証と考えられます。次に、これらの土器と共



他地域から持ち込まれた土器

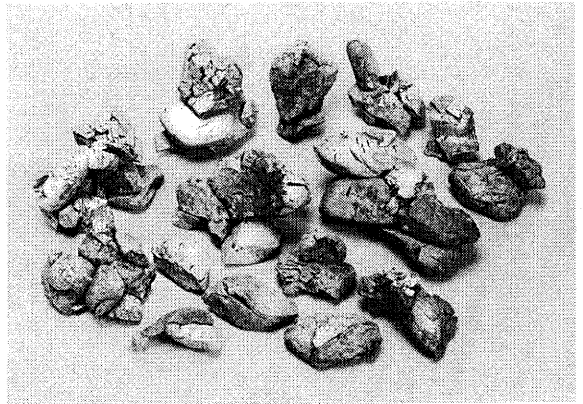
に出土した石鏃^{せきぞく}などを作るための石である黒曜石の産出地を調べたところ、雨間から数百km以上も離れた長野県の和田峠^{こうづしま}周辺や、伊豆諸島の神津島から産出したものであることがわかりました。なぜ遠い地域から手に入れる必要があったのでしょうか。それはおそらく入手は困難ですが、ガラス質のこの石が獲物を捕るために非常に良好な石であったためと考えられます。さながら縄文時代のダイヤのような価値があった石だったと思われる。

これらの土器や石材が雨間に直接入ってきたのか、それとも間接的に他の遺跡を経由して入ってきたものかについては明確にすることはできませんでしたが、雨間が他地域との活発な交流の場であったことには間違いのないと思います。また、その交流の範囲が、我々現代人の想像を絶する、実に広範囲な地域と関係していたことがわかりただけかと思えます。

では、雨間にやって来る目的は何だったのでしょうか。その一つとして豊富な植物資源ではないかと考えられます。それは土器に付着した球根(ユリ科かヒガンバナ科)や黒色の付着物(分析の結果植物性のものであることがわかりましたが、種類を特定することはできませんでした)のある土器が多量に出土したためです。雨間の縄文人たちは、球根などの植物を調理したり加工したりしていたものと考えられます。この考えを裏づけるものとして、植物資源を獲得するため使われた土掘り具としての石器(打製石斧^{だせいせきき})が多量に出土していることがあげられます。また、木の实^{いしざら}などを磨り潰すために用いられたと考えられる石皿^{すりいし}や磨石なども出土しています。雨間の縄文人は、この食料資源を求めて多くの地域との交流を活発に行っていたものと思われる。

話は変わりますが、縄文時代の調理施設と考えられる集石土坑から出土した焼けた石は、非常に奇妙な形でく

つついたり、変形したりひび割れが入っていました(写真)。最近の他の遺跡の調査でも何例か確認されていますが、これほどまでにくつついたりした状態の石が数多く出土した例はありません。焼けた石の熱せられた温度を調べた結果、約1,200度の高温であることがわかりました。縄文時代の人たちがどのようにして、また、なぜこれほどまで高い温度を作り出したかはわかりませんでした。ちなみに縄文土器^{のやき}を野焼きする時の温度は約700度です。



集石土坑出土のくつついた石

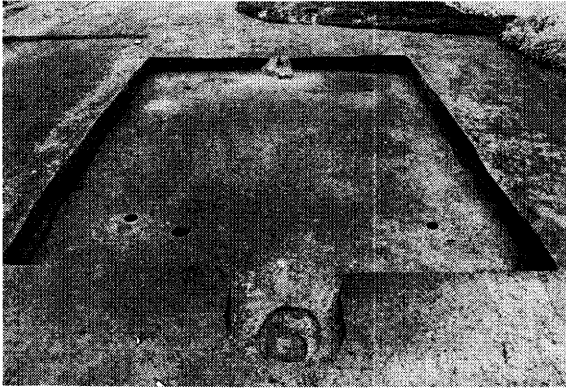
古墳時代 - 大きな大きな家の跡 -

古墳時代は、約1千7百年前から1千4百年前までの約400年間をいいます。この時代を3つの時期に分け古い方から前期、中期、後期としています。

雨間の調査で出土したこの時代の遺構^{けん}や遺物は、後期に位置づけられるもので、住居跡14軒、土坑1基(土器を焼いた施設)、溝1条(東西76m、南北35.5mの西側が開口したコ字状の溝)が非常にまとまった形で出土しました。ここでは、14軒の住居跡のうち、特に大きな3軒の住居について主に紹介します。

市内でこの時期の最大の住居跡は、雨間の東、数百mに位置する宮ヶ谷戸遺跡から出土した住居跡(約133㎡)です。長辺が13.8m、短辺が11.6mの大きさを持ち、遺物も多量に出土しました。雨間の住居跡は、これに次ぐ規模のものでした。

大形住居は地面を掘りくぼめて床をつくり、そこに4本の柱を立て、上屋となる屋根をかけた^{たてあなしき}竪穴式住居と呼ばれるものです。床の面積は大きい方から約130㎡(11号住)、約128㎡(1号住)、約97㎡(9号住)ありました。実際に居住する空間として利用した面積は、屋根などを考慮すると更に大きな広さがあったと考えられます。形



雨間最大の住居跡（11号住居）

は長方形で、隅の丸いものもあります。北側の壁中央部分に、煮炊きをするための設備であるカマドが作られ、南側の壁中央部からは、貯蔵用の穴が壁から張り出すように作られています。柱の穴は4本を主としていました。3軒を比べて作りが唯一ちがう点は、9号住だけに2つのカマドが作られていたことです。大家族のためカマドが2つないと一度に食事ができなかつたのでしょうか。

次に、出土した遺物について見てみましょう。遺物の量が最も多いのは、2つのカマドを持つ9号住でした。次いで11号住、1号住の順でしたが、形がわかるまでに復元できた土器が多いのは1号住、9号住、11号住の順でした。遺物は、煮炊きや貯蔵用に使われた甕、蒸し器として使われた甑、盛りつけなどに使われた坏、カマドの中で甕を支えるために使われた支脚、糸を紡ぐための紡錘車などの日常生活で使われた道具の他に、祭祀に使われた手づくね土器、装飾品として使われた耳環・勾玉などの土製品という特殊な遺物など非常に様々なものが出土しました。また、用途は明確ではありませんが、簀（篠竹などであらく編んだむしろ）などを編む時に使わ



カマドを2つもった住居跡（9号住居）

れた重りと考えられる編み物石や、作業に使った台石などの石器も出土しています。

最も大形の11号住からは耳環などの土製品がまとまって出土していますが、手づくね土器は1点も出土していません。逆に、1号住からは手づくね土器が出土していますが、装飾的な土製品は出土していません。手づくね土器とこの土製品の2つを出土するのは9号住だけです。これは宮ヶ谷戸遺跡の大形住居跡と同様の出土の仕方です。また、この2つの住居跡はカマドの数が異なる点を除けば、住居内の遺物出土状態が非常に類似していました。例えば、カマドを中心に甕、甑、坏などが散布しており、住居西側の壁近くに祭祀用の手づくね土器が出土し、張り出しの貯蔵穴周辺からは、編み物石と作業台石がまとまった形で出土しました。雨間遺跡と宮ヶ谷戸遺跡は、おそらく住居内の利用方法が類似していたものと思います。

11号住から出土した遺物の中には他の地域から持ち込まれたと思われる口縁に段を持つ有段口縁坏が2点出土しています。これらの土器は土の成分からこの地域で作られたものでなく、明らかに埼玉県地方で作られたものであるため、そうした地域との交流が行われていたことが伺われます。

以上のように大形住居の作りや遺物について見てきましたが、出土した遺物からは身分差を示すような特殊なものはありませんでした。しかし、これだけ大きな家を造るにはかなりの人力が必要なことは確かであり、大形住居に住む人に集団を統率する支配力があつたと思われる。

発掘調査からは、集落の規模や生活様式、交流等様々な事実を実証することができます。雨間の調査でも様々な遺構や遺物が発見され、当時の生活を垣間見ることができました。今回ここに紹介した多くの資料は、現在二宮考古館で開催しています企画展「掘り起こされたあきる野の歴史」で展示していますので、是非ご覧いただければ幸いです。

企画展「掘り起こされたあきる野の歴史」

期 間：5月31日(月)まで

時 間：午前10時から午後4時まで

休館日：祝日、火・水曜日（祝日が水曜日にあたる場合は翌日も休館日）

問い合わせ：二宮考古館、電話 559-8400